

# 「同化」と「母性」の狭間で

## —王西彦「家鴿」論争を読む—

西 村 正 男

### 1. はじめに

一九三八年四月、「抗戦の名士」を諷刺する張天翼の短篇小説「華威先生」が発表されると、ほどないうちに抗戦陣営内部の暗黒部を暴露すべきか否かをめぐり論争が起きた。「暴露と諷刺」論争として文学史に記されているこの論争について、まずは振り返ってみたい。

「華威先生」のあらすじは以下のようなものだった。……抗日戦争の指導者をもって自任する華威先生は、他人に自己の権威を認めさせるためにあらゆる集会に顔を出しては演説して歩いている。が、彼の知らないうちに座談会が開かれたことに激怒し、参加した青年をさんざん罵ったあげく酒を痛飲する……。

この短篇小説に対しては、発表直後に抗戦の厳肅性を損ね誤解を招くという意見が出たが、多くの人が文章を書き「暴露と諷刺」は抗戦に対し有益であると弁護した。しかしながら問題はこれでは収まらず、日本の改造社の雑誌『文芸』に増田涉訳の「華威先生」が訳載されるに及び、敵の反中国宣伝の材料とされるような作品を輸出すべきでないとする文章が発表され<sup>\*1</sup>、さらに大きな論争を生む。左翼文化人の間では、結局は社会の暗黒面の暴露の必要性で意見の一致を見るが、その後も「暴露と諷刺」に反対する文章や、それらに対する再反論が発表されるなど論争は続いた。

五四以来の中国の新文学の多くが社会の矛盾や病理を抉り取ろうとしてきたことを考えれば、社会を諷刺する小説が抗日戦争の勃発後になってはじめて問題とされたという事実は興味深い。この論争では抗日戦争という国を挙げての政治的な目標のために社会批判が問題視されたわけだが、しかし「華威先生」は結局のところ左翼文学者の間では肯定すべき作品という共通の認識を得るに至っている。ところが、もし諷刺の対象が女性であったらどうであろうか。総力戦の中では女性であっても戦争と無関係ではいられないが、抗戦に従事する女性を諷刺すれば、あるいは女性が抗戦に加わることの困難を諷刺的に描けば、それは抗戦陣営の結束を乱すことになるだろうか。それとも「華威先生」と同様に、必要な暴露であると見なされるのだろうか。

本稿では、王西彦が抗戦への情熱にとりつかれるものの挫折する女性を諷刺的に描いた「家鴿」とそれによって引き起こされた王と孔羅荪<sup>\*2</sup>との間の論争を取り上げる。王西彦は「華威先生」の発表前後張天翼と親密な関係にあり、当時彼を弁護する文章も執筆して

いる\*<sup>3</sup>。また孔羅荪も「華威先生」式の創作を擁護する発言をしている\*<sup>4</sup>。しかしながら、諷刺の対象が女性になると、彼らの見解に相違が生じてしまうのはなぜだろうか。

本稿では、このような問題を踏まえながら、戦争と女性であることとの関係がこの時期どのように表象されてきたのかを考察したい。

## 2. 「家鴿」と孔羅荪の批判

王西彦の「家鴿」（どばと）は、一九四一年四月二三日に書かれ、自ら主編を務める『現代文芸』第三巻第一期（同月二五日発行）に掲載された。小説中に描かれているのは、抗日戦争中のある中産階級の夫婦である。物語は三月八日の情景から始まる。国際婦人デー（三八節）婦女紀念会で講演をする妻の姚文英は、朝からこの講演のことばかり考えているが、実はその原稿は夫の洪志彬の手によるもので、しかも妻の頭の中を占めているのは、講演の内容よりもむしろ自分が他人の目にどのように映っているかということばかりである。第二・三節では、紀念会の前後の妻の虚栄心が描写されるが、その間に妻を心配し哀れむ夫の心情の描写が挟まれている。結婚後子供ができ青春時代の情熱が失われた彼女は、重苦しい現実の中の気晴らしを求めているのだ、と夫は思う。そして「英、きみはどう見ても単なるどばとなのに、今きみは風雨に向かって飛ぼうとしている。ああ、きみの幻の翼が避けようもない傷を負わなければいいがなあ」と独り言を言う。

第四節は、夫が妻に議論を仕掛ける部分である。妻は女権論争についての文章を新聞で読み、大学教授兼小説家の書いた「談家庭」という文章は女性を侮辱しているとの思いを強くしたと憤る（この大学教授兼小説家とは後で見ると沈從文のことである）。それに対し夫は、挑発的な態度で、「[前略]彼の「生物的平等」の立場からの論点も全く成り立たないわけではないよ。公平に言って、僕も同感するところがあるんだ。生理上の差異が男女間の異なった平等[原文：「不相同の平等」、西村註、以下同様]を規定しているのだ…」と述べる。さらに、「僕が言いたいのは、君たち女性にはもともと生理上の制限があり、このような制限は生まれつきで、人の力では変えようがないということだ…」とも述べる。やがて「談家庭」を書いた教授夫妻自身のこと話題に上る。教授の妻はもともと夫を愛してはいなかったが、妻の母がこの教授が有名な小説家であることを知り、彼女の一存で娘を彼に嫁がせたということに話が及ぶと、夫は、このことから女が全く自由な魂をもたないことをさらに証明できると言う。そして「女の生命と幸せの代価は犠牲だ、女のあらゆる責任は「犠牲」二文字にある——」とまで言い切る。

第五節では、婦女運動促進会から負傷兵を慰労する慰労隊を組織するための準備会の招待状が届き、興奮する妻が夫に発言を下書きしてもらう姿が描かれる。続いて、最終節の第六節では妻が慰労隊の代表に選ばれ、二日後に前線に出発することになる。心配し、自分の仕事で子供たちの世話をどうするのか、と問う夫に、一ヶ月前後で帰って来られるからと妻は家を出る。彼女がいない家では子供が発熱し夫は大わらわである。一方妻は雨の道中、前のバスが川に転落し橋が壊れたことに恐れをなし、家庭に戻る。

簡単にまとめれば、この小説は、抗戦に参加することを余りにも容易に考え、情熱にと

りつかれる女性を諷刺したもの、ということができるだろう。

一方、孔羅荪による批判、「籠」と「鳥」——關於「家鴿」及其他的一段雜感」が発表されたのは、小説が発表されてから一年以上たった一九四二年六月一五日のことだった\*5。この批判の内容を簡単に見てみよう。

孔はまず、当時の婦女問題を振り返り、少し前、女子職員問題が起きたとき為政者は密かに条例を定め、あるいは理由を付けて徐々に女性を解雇したと述べる。続けて俎上に上げられるのは尹及「談婦女」と従文[沈従文]「談家庭」という文章である。尹及は男女は生物学上平等であるが、とりわけ女性は性の武器によって夫を服従させることができるのでむしろ女性の方がしばしば優勢であることもあるとし、さらに、女性は家の中でのみ平等を得ることが出来るのだから、女性の真の位置は家庭であると断定したという。また従文は女性解放論者の女性と反対論者の男性がかつて論争し合ったが、この二人がやがて結婚すると女性は家庭に反対する文章を書かなくなり男性は女性差別をやめた、という「実例」を挙げ、女性にとって相応の家庭があれば問題は何もないのだと断定したという。孔羅荪は、これらの論点を、女性問題を社会問題と切り離した見方だとして非難する。

続いて「家鴿」批判へと筆先が向けられる。まず孔は、作者は女性を籠の中の鳥に喩え「女性の真の位置は家庭の中」という論断を形象化している、と決めつける。続いて内容を紹介し、物語は沈従文の挙げた例よりも感動的であり、より「女性の真の位置は家庭の中」という結論の正確さを証明していると繰り返す。さらに、具体的な内容について批判を加えていく。以下に要約して引用する。

…作者は冒頭で女主人公の売名主義[原文「風頭主義」]や虚偽への憧れを強調、新生活への本能的な欲求を抑圧している。…作者は夫の口を借りて、…女性の行為を批判している。…作者は…女性の社会活動を暮らしの中の気晴らし、平凡な家庭生活における刺激と見なし、…「家庭」の外の広大な社会の存在を忘れている。…作者は…同情を全く男の方に置き、哀れみと感慨の気持ちで女主人公を描いている。ここでは、男性の潜在的な残酷性が見られる。…男主人公は沈教授[「談家庭」]よりもさらに徹底している。…「女性の生命と幸せの代価は犠牲だ、女性のあらゆる責任は「犠牲」二文字にある」という言葉は徹底した三従論ではないか。…作者は家庭生活の矛盾を深く掘り下げようとせず、…「女性は自主的な魂を持たない」とするのみだ。…作者が広い原野や森にいる鳥を多く見ていれば結論は違っただろう。

このように批判を加えた上で、次のように結論づける。作者というものは、視野を広げ例証も普通のを多く引用すべきであり、自分のわずかな経験やわずかな特殊現象によってすべてを概括すると、偏りが出てしまうのだ、と。そして、多くの女性はすでに戦場や各種の闘争の場所へと向かっており、「籠」と「籠の外の社会」を見ようとせずに女性は籠の中にいるべきだと決めつけるのは正確ではない、と述べて文章を結ぶ。

王西彦自身が後に反論するように、この孔羅荪の批判は「作品中の男主人公の観点によって作者自身の観点を代表させ、同時に作品中の女主人公によって女性全体を代表させている\*6」。しかしながら、孔羅荪はなぜこのような明らかに粗雑なやり方で王西彦を「女性の位置は家庭」論者と断定したのだろうか。このことを考えるためにも、ここで当時の「婦

女問題」を振り返ってみたい\*7。

まず、孔羅荪がはじめに触れた女職員問題だが、この時期、女子職員の雇用制限が波紋を呼んでいた。まず、一九三九年九月十八日、中国郵政総局は女子職員の採用を管理局、一等局に限り、かつ女子職員の割合を当該局員全体の五パーセント以内とし、また既婚女性には退職させ、採用は未婚に限るなどの通達を出した。これは各地の政府機関、企業、病院や学校などに連鎖反応を引き起こした。これに対し各地の女性職員は、郵政局に撤回を要求、政府にもこのような女性の締め出しをせず未婚・既婚の差別をせぬよう各機関に命ずることを求めた。さらに多くの女性刊行物も次々に文章を発表、座談会も開かれるなど反対運動は盛り上がりを見せた。中共南方局もこの問題に関心を寄せた。また、国民参政会では女性参政員が女性の就職の権利を呼びかけた。結局、四二年二月になってはじめて政府は各機関に女性職員の締め出しをせぬよう命令し、三月五日には郵政総局が女性職員の結婚制限を取り消した。

『中国婦女運動史』は、各地に巻き起こした雇用制限の連鎖反応のうち、福建がとりわけ厳しかったとしており、全国的な流れを説明する以外に地方的な雇用制限事件として特に福建の事件を紹介している。それによればまず、一九三八年に省政府が日本の侵略により福州から永安に移動する際、女性を辞職させ、続いて一九四〇年八月には省政府主席の陳儀が省営の貿易会社と運輸会社に女性の解雇と採用中止を、政幹団に女子講習生の受け入れの中止を命じた。これに対してもやはり激しい抗議があったが、陳儀が四一年八月に解任されるまで問題は解決しなかったという。この事件の背後には陳儀の「理想国」論があった。一九三九年十月、彼は「我的理想国」と題する講演を行い、『改進黨』第二卷第五期(一九三九年十二月一日発行)に発表した\*8。この中で陳儀は、女性には高等教育は必要なく、男性は社会で奉仕し、女性は家庭で子育て・炊事・裁縫などの奉仕をするべきだと述べた\*9。これに対しても福建省内外で多くの抗議が寄せられたという\*10。

実は王西彦は一九三九年末から四一年末にかけて、この福建の戦時省都・永安の改進出版社に在籍していた。改進出版社は福建省政府の官営出版社(社長は黎烈文)で、王はここで「家鴿」を掲載した『現代文芸』の主編を務めていたのだ。王自身の言葉を借りれば、「省政府主席を務めていた男[陳儀を指す]が、国民党内部の派閥競争における「開明派」であった。そのため、彼の勢力範囲内には、進歩的傾向の文化人を受け入れ割と進歩的な出版物を出版することのできる隙間ができた\*11」とのことである。陳儀の「我的理想国」を掲載した『改進黨』も当然ながら改進出版社の出版物であり、王西彦も多くの文章を寄稿している。あるいはこの事実が、孔羅荪をして王西彦を陳儀の「理想国」論の賛同者と思わしめたのかもしれない\*12。

一方、女職員問題に続いて孔羅荪が批判した尹及「談婦女」と従文「談家庭」\*13であるが、これら二篇はともに昆明の雑誌『戦国策』に掲載されている。『戦国策』を拠点とした「戦国(策)派」は、西南聯合大学の教授たちを中心とし、近年その独自の歴史認識が再評価されているものの、「これまで親国民党と親ファシズム的傾向を指弾されて、全否定的に取り扱われてきた\*14」。『中国婦女運動史』も、「[前略]『戦国策』誌と『大公報』の『戦国週刊』はファッショ思想をおおびらに宣伝し、中国共産党と抗日闘争を侮蔑し、当時

の人に「戦国策派」と呼ばれた」とした上で、「女は家に」問題についても『戦国策』は多くの謬論を発表した。その典型的な代表が尹及「談婦女」と沈從文「談家庭」である\*<sup>15</sup>と述べる。尹及は、男女の生物的平等を主張し、その上で女性の真の位置は、平等の得ることのできる家庭であると断言した。また沈從文は生理上の差異がある男女は「分業協力」するべきだとしたというのだ。実は、王西彦は三十年代北平での学生時代、この沈從文に原稿に手を入れてもらうなど、ある種の師弟関係にあった。先に見たようにこの沈從文の文章は「家鴿」の中でも引用されていて、激しく反発を覚える妻に対し、夫は沈の文章に対し理解を示している\*<sup>16</sup>。このことも孔羅荪に疑念を抱かせる要因になったかもしれない\*<sup>17</sup>。しかし、盧溝橋事変の後には、彼らは一九七九年になるまで会っておらず、当時の女性問題について直接意見を交わした可能性はない\*<sup>18</sup>。

以上で見てきたように、王西彦と「女は家に」論者との間に接点がいくつか見られることが、孔羅荪の批判を呼んだ可能性はある。しかしながら王を「女は家に」論者と断定するだけでは問題を片づけることはできないだろう(本稿では王西彦が実際に「女は家に」論者であったかどうかを問うことはしない)。「家鴿」は、一見したところ「女は家に」論に類似した印象を与えるかも知れないが、ここには孔羅荪が気づかなかった重要な視点が隠れているのではないかと。次節では、王西彦による孔に対する反論を見てみよう。

### 3. 王西彦における女性

「雑感」が発表された四二年六月、王西彦は、すでに発表済みであった小説を改作し、その中でも女性知識人の戦争中における選択を扱っている\*<sup>19</sup>。そして九月五日に、孔羅荪に対し自己の立場を説明した「關於「家鴿」的辯解」\*<sup>20</sup>を執筆するのである。

王はここですで、「家鴿」執筆の意図を、抗戦中の人間性(「人性」)を発掘するためとする。「我々はもうあるスローガンや標語の下にその場しのぎの文章を書くわけにはいけなくなり、もう奇をてらった神話や単純な英雄物語を書くわけにはいけなくなった。我々は一步前に進むべきであり、抗戦の試練の中で現れた人間性を描こうと試みるべきである。」と彼は言う。彼はそもそもは、ある弱い女性・突然の高遠な幻想・破れやすい夢といったテーマで小説を書こうと思ったが、人間性というものは生活の土壌の中で結んだ果実であり神棚の中で作り出す訳にはいけないと思い、(主人公・姚文英のイメージは早くからあったものの)書くには至っていなかった。そこへ「婦女問題」が起り、姚文英のことが頭にあったため読んでみると、天真な論客が繰り返し喚いており、その情熱や勇気には失笑させられた。そこで、今こそ書くべきだと思い、自分の婦女問題に対する考えの一部を盛り込みながら「家鴿」を書いたのだという。

発表後二週間もしない内に、ある国立大学的女子学生から抗議の手紙を受け取った彼は、次のような返事を書いたという。……女子学生が言うように、「家鴿」は女性に対する一本の鞭であるが、それは抑圧者の鞭ではなく督促者の鞭なのだ。誰が女性の圧迫者か。「家鴿」の男主人公か。それとも「女は家に」論者か。いや、女性自身を含む社会である。社会がまだ不合理であるのに「我々を解放せよ」などと徒らに叫んでも役に立たない。「家鴿」の

女主人公・姚文英のような、おしゃれや虚栄に夢中で男性に阿り、現実をも自分をも知らない人物が、翼を羽ばたかせる海燕になることができるだろうか。もし私が時流に合わせて良心を覆い隠し、彼女を突然勇敢な戦士に変えたなら、あなた達はおかしいとは思わないだろうか……と。

彼は、その他にも多くの友人や読者から手紙を受け取り、その中には抗議や彼の「落伍思想」を惜しむものもあったが、彼がまじめに女性に問題を投げかけたと考えた者もいたという。そして、主人公を試練に耐えられる人物として描き、彼女が弱点を克服し、ついには海燕となり、籠の中から風雨へと飛び立つように正面から描くのが一番よい、と言う者もいたが、王西彦は返信で、婦女人題について書かれた文章のあまりに楽観的で天真な態度を見たならば、私のこのような反面からの文章にも反対しないだろう、と答えたとしている。また重慶の女性誌数誌で「家鴿」への異議が載った\*<sup>21</sup>が、天真で苦笑するしかなかったと彼は言う。一方、初めに抗議の手紙を書いた女子学生はその後の手紙で理解を示したという。

そして、「家鴿」のことを忘れかけた今頃になって孔羅荪の文章を目にした、としてその「曲解」に対し、王は反論を述べていく。大意を以下にまとめてみよう。

羅荪先生のように、虚栄的な衝動で女性が慰勞隊に参加し、外の風雨に耐えかねて戻ってくるという話を「女性の真の位置は家庭だ」という結論を証明していると断定するならば、もし抗戦に対して信念がしっかりしない人物を描いたならば敵への投降に賛成することになるではないか\*<sup>22</sup>。もし他の作品で私が全く違うタイプの女性、真の海燕を描けば私の思想の矛盾、あるいは神経病ということになるのだろうか。孔羅荪は「家鴿」を犠牲にして尹及や沈從文の注釈とし、自分の「雜感」を発しただけである。男主人公の観点によって作者の観点を代表し、女主人公によって女性全体を代表させている。男主人公の女主人公に対する毒々しく滑稽な批評もすべて作者へと転嫁し、男主人公の言う「君たち女性は、……正直に言ってずっと「魂のない動物」、平等など問題外だと言われてきた。」や「女性の生命と幸せの代価は犠牲だ、女性のすべての責任は「犠牲」二文字にある——」等の論調も作者の観点とされている。

続いて、どうして男主人公をこれほど残酷に、女主人公をこれほど無能に描いたかについて説明される。静かな家庭生活に安んじる主婦である女主人公を小説化する際には変化が必要となるが、その変化とは、ここでは小説中に言う「沈鬱な暮らしの中の気晴らしを求める」ことであり、女性全体の前途に対する目覚めではない。こうである以上、作者が女主人公の自覚に欠けた衝動や、この種の衝動によって彼女を海燕へと変えることができないことを描き出そうとするのは当然のことではないか、また女主人公が突然英雄に変わったりすれば可笑しいではないか。一方男主人公は、平々凡々たる傍観者として描いたが、彼が陳腐な論調を女主人公に対して向けるのは、女主人公の生活態度を際立たせるためである。このような陳腐な論調に対し彼女は当然抗議するが、それはどれほど可笑しい抗議であることか、と彼は言う。孔羅荪の言う男主人公の「潜在的な残酷性」もぬれぎぬである(ふつうの男性が持つ身勝手さはあるものの)と彼は主張し、また作者が家庭生活の矛盾とその症状の在処を把握しようとしていないという孔羅荪の批判に対しては、孔が別のと

ここで王の小説から社会環境における家庭生活の矛盾を見いだすことが出来る、と述べている不統一を指摘し、孔は作者に経済権や社会改革などの陳腐なスローガンを付け加えるべきだというのか、と反駁する。

次に女性問題全体についての見解を述べる。彼は現下の社会環境における家庭に存在する矛盾については、もう一つの小説で全く異なる女性を描いている、という。即ち、社会改革に身を投じるために、家庭の束縛を受けることを嫌う独身主義者の女性を\*<sup>23</sup>。そして彼は次のように述べる。

高等教育を受けた女性は、結婚してしまうと、おのずから子供ができる。家庭生活の負担も生じ、事実上彼女が社会に再び身を投じることはできなくなり、その結果、彼女が受けた教育は悲しむべき浪費となってしまう。我々は普段崇高な母性を賛美し、一方で女性達にあらゆるものを顧みずに家庭の束縛を逃れるよう要求するが、このような矛盾した当を得ない言葉は、恐らく女性問題自体にはほとんど益するところがないのではないか。ではどうやってこの問題を解決するか。家庭に戻るか。独身主義を貫くか。それとも家庭を持った後何をも顧みずに飛び出すか。羅蓀先生は後者に賛成するようだ。しかし私は、「家鴿」ではただ姚文英のような人が、あのような家庭生活や社会環境にあっては、どばとから急に海燕に変わることは極めて起こりにくいことを表現したのみである。もう一つの作品では、とりあえずのところ私もまだなにか肯定的な主張や或いは「結論」は、はっきりとは提出していない。

王西彦は、広大な原野や森を飛ぶ鳥のような女性も見つこともあり、そのような女性を小説にも描いていて、彼女たちに対し尊敬を惜しまないと言うが、ただ女性問題に何らかの結論を軽率に下すことができないのと同様、これらの女性の前途を軽率に予想することはできないとも述べる。孔羅蓀の言う「作家は視野を広げるべき」という言葉に対しては、この言葉は「家鴿」には関係がなく、彼自身「家鴿」の主人公が女性全体を代表するとは言っておらず、鳥にいろいろな種類があるように女性の中にも英雄や志士がいる他に、どうして姚文英のような人物がいてはいけないことがあろうか、と反論する。

以上の内容で注目すべき点は、王が女性問題を深刻に捉え、女性であることと抗戦参加・社会参加を対立させて考えていることである。この対立は、「母性」と「国家への貢献」の対立と言い換えてもよいだろう。そして、文中でも述べていたとおり、彼はこの「母性」と「国家への貢献」の間に位置する様々な女性のヴァリエーションを小説中に描いている。

そもそも、彼は三十年代の学生時代から知識階級の女性の進路をテーマにした小説を書いていた\*<sup>24</sup>。抗戦勃発後では、「家鴿」以前にも一九三九年春に短篇小説「煉冶」を執筆、『文学月報』第一卷第六期(一九四〇年六月十五日)に発表している。そして羅蓀の「雑感」が発表されてからは、「雑感」と同月に「霞」を「曠野」へと改作\*<sup>25</sup>、また二ヶ月後の四二年八月には独身主義者の難童学校教師が登場する「深淵」(長篇小説『古屋』第二部)を執筆\*<sup>26</sup>、さらに「辯解」を書いた十日後の九月十五日には「雨天」、さらに十月十六日には「紅花」を執筆する。翌四三年七月に発表された「母性」も最近の文集では「紅花」と同じ十月十六日の執筆とされている\*<sup>27</sup>。このように「家鴿」論争直後に彼が女性を数多く描いたのは、「家鴿」論争における自分の主張、すなわち「家鴿」の主人公が女性全体を代

表するわけではなくその他にも様々な女性がいること、従って作者は「女性の真の位置は家庭」であるとは思っていないことを、小説をもって(事後的にはあるが)補強し、彼が「女性の位置は家庭」論者ではないことを証明しようとしたのではないか、と思えてくる。

それではこれらの小説の内容を簡単に確認しておこう。「煉冶」の主人公は、語り手の教える学校の生徒で、これまで女給や校正係として生計を立ててきた章傑である。田舎に避難している彼女の母と弟は彼女の収入に頼っている。父は理想を追って遠いところにいるという。トルストイやドストエフスキーの小説に啓発を受けた彼女は母や弟と共に前線に向かうことになる。

「曠野」に登場するのは、戦地で宣伝隊に参加した女性である。語り手は三八年夏、戦地から漢口へと向かう列車の中で彼女と知り合う。女子師範学校で学んでいた彼女は戦火が迫り学校が解散すると同級生らと共に宣伝隊の活動を行ったのだ。彼女は昆明の大学教授の父のもとへ向かうが長沙で負傷兵の看護をするか迷うが、トルストイが家庭を捨てた話に感銘を受け、「抗戦の聖地」へと向かう。

「雨天」は、語り手が前線で日本軍に殺された幼なじみの家に向かうところから始まる。そこには年老いた両親と未亡人、遺児が住んでいた。語り手と未亡人はツルゲーネフの女性について語り合い、未亡人はこれからの進路について思いをなす。夜になって彼女は決心を告白する。子供を祖母に預け、夫のいたところに行き彼の意志を引き継ぐというのだ。その後語り手は、この時代に個人の苦しみや犠牲がなんだというのだ、と記された手紙を受け取るが、残された老人と子供の運命を思い、彼は外を見やる。

「紅花」の主人公は、理想に殉じた大学教師の夫の意志を継ごうとして彼がいた場所に向かった姉の代わりに、甥の世話をし暮らす主人公。甥がジフテリアにかかって死ぬと自分も姉のところに行く決意をする。

「母性」の主人公は貴州で負傷兵のために服務するため子供を捨てて夫とも別れなければならない。友人は、抗戦工作のためには個人的な情を犠牲にしなければならないと説くが、彼女は反発を覚え、道中も子供を失ったことが正しい選択だったか何度も悩む。夫は抗戦の前には個人の犠牲がいかに小さいか説くが、彼女は声を上げて泣き始める。

このように彼は抗戦と<sup>フェミニティー</sup>女性性が対立することを前提に、その狭間にある女性の問題を繰り返し描いた。これらの小説では、たとえ女性が最終的に戦地へ旅立つことになっても、その選択は苦渋に満ちたものであるし、その前途に明るい見通しも与えられていない。孔羅荪が、女性の解放や女性の「戦場や各種の闘争の場」への参加を説くだけで、その実現の困難、ひいては女性性と国家・抗戦との対立を見出だそうとしなかったのに比べ、その差異は歴然としている。

女性性と国家・抗戦との対立をめぐるのは、例えば孟悦・戴錦華によるフェミニズムの視点からの中国現代文学史の試み『浮出歴史地表』における以下のような記述が示唆的である。同書では、四十年代の国民党統治区において女性の置かれた立場が、知識、人間性、個性などと同様に苦況にあったことが指摘されるのに続き、次のように述べられている。

もちろん、イデオロギー神話の考え方に従えば、女性の目の前には早くから陽光に輝く道が広がっていた。郁茹の中篇『遙遠の愛』[重慶・自強出版社、一九四四年]はある女性



がこの陽光に輝く道を歩み出す過程を描いた。それはすなわち、個人を放棄し、あるいは個人を蔑み、「全身全霊を民族に貢献する」(茅盾の言葉)ことである。当時の現実の社会に千万人ものこのような女性が実際にいたことは否定できないが、しかし、当時の流行した観念の中では、個人・女性・幸福……は集団の未来とは共存できなかったということも否定できない。羅維娜[『遙遠的愛』の主人公]はまさしく元々持っていた個性と女性の立場を少しずつ洗い落とすことによってはじめて、神話の語りの中にはいることが許され、「時代の主潮に追いつき」「頭を上げて闊歩する」者となれたのだ。(茅盾「『遙遠的愛』について」[『關於『遙遠的愛』』、もともと『遙遠的愛』の単行本に付されている。])これは果たして女性の勝利なのかそれとも女性の敗北なのか、女性にとっての平坦な道なのか行き止まりなのかは何とも言えない\*28。

思うに、ここで触れられた『遙遠的愛』こそ、孔羅荪が欲していたような小説なのではないだろうか。しかしながらここでの議論に従えば、この女性の道は「女性の立場」を失って初めて可能になる。王西彦の「家鴿」論争や女性をめぐる小説における態度は、『浮出歴史地表』の著者が『遙遠的愛』の女性に「女性」と「民族」の対立を見だし、肯定か否定かの結論を保留していることに相通じるところがあるように思われる。(『遙遠的愛』の羅維娜と違い、王西彦の描く主人公は「女性の立場」と抗戦の間でなかなか身動きがとれないのである。)'『浮出歴史地表』は、引用部分に続き、共産党の支配区で実現された「男女平等」により女性は「無性の性」になったと述べているが、このような見方に鑑みれば、王西彦が四二年という時点で「女性の立場」を重視する主張をしていたことは、共産党支配区及び人民共和國建國後の中国の女性問題を考える上でも大きな意味を持つのではないだろうか。

#### 4. 「同化」と「母性」を越えて

ここで以上の内容を整理しておこう。孔羅荪が女性に対し男性と同等の資格で「国家」「民族」に貢献することを説いたのに対し、王西彦は(もしかすると福建省経営の改進出版社の編集者という立場が彼の思考に影響を与えたのかも知れないが)、抗戦＝「国家」「民族」と女性であること＝<sup>フェミニティー</sup>「女性性」の対立を見出し、女性の抗戦参加の困難さを様々なヴァリエーションをもって描いた。したがって簡単に言えば、彼らの相違点は、国家・民族への同化を重視するかそれとも女性性にも重きを置くか、というところにあると言えよう。抗戦がすべてを圧倒する時代において、「母性」や女性性の問題の問題にも目を配った王西彦の言説は、注目に値する。

さて、本稿を結ぶために、ここで新たな観点を一つ提示してみたい。すなわち、そもそも「母性」というものが国民国家と同様に近代の発明であったという議論である。上野千鶴子によれば、「近年の母性主義をめぐるフェミニズム研究が明らかにしたのは、「母性」もまた「近代」の発明品であり、母性主義は近代の産物としてのフェミニズムがとりうるヴァージョンの一種である、という見解である\*29」という。実は近代への扉を開こうとする清末中国においても、女子教育の目標として「賢母良妻」が主張されたが、この「賢母良妻」

は国家への貢献と結びつけられて考えられたのだった。夏曉虹はその著書『晚清文人婦女観』において、清末の女性をめぐる言説を具に検討し、当時女性を位置づける呼称としてこの「賢母良妻」という言葉が用いられる一方、これに対立する概念として「非賢母良妻」があったことに触れている。前者は女性の家庭に対する役割を特に重視したのに対し、後者は国民としての身分や国家に対する責任を重んじ、女子教育の最高目標を女性国民の創出としていた。しかしながら「賢母良妻」論者も、女性は家の切り盛りが本分であると見ていたとはいえ、「このことは女性が必ず国民意識と絶縁しなければならないということを意味していたわけではない\*<sup>30</sup>」。むしろ、女性が国家思想をもって夫を激励し子女を教育することによって、家に居ながらにして救国に役立つことができるとさえ考えられたのだ。そして「賢母良妻」「非賢母良妻」両派ともに受け入れられたのが「国民之母」というタームだった。しかし急進派（「非賢母良妻」）は激しく穏健派（「賢母良妻」）を攻撃し、完全な男女平等を主張し、穏健派もそれに対して反論したという。

このように見ると、王西彦が立ちすくんだ「母性」か「同化」かというジレンマは早くも清末から存在し、しかもそのいずれもが国民意識と結びつけられていたことが分かる\*<sup>31</sup>。つまり、次のようなことが言えはしないだろうか。孔羅荪の重視する国家・民族への「同化」も、王西彦が重きを置く「母性」も、つまるところ近代国家のもたらした概念範疇に属するのではないか、そしてこのジレンマを越えるためには、「国民之母」、「女性の国民化」そのものを疑うことから始めなければならないのではないか、ということが。

とりあえず、ここでは王西彦の小説や議論において、近代国家の言説の特徴を具現していると思われる点を二点ほど指摘しておこう。まず第一に、王西彦が小説に於いて女性の様々なヴァリエーションをケーススタディーとして近代の文脈に並置している点である。女性の抱えた問題に対していかに同情的であっても、結局は彼女たちの声を伝えるよりも、彼女たちを近代の文脈にサンプルとして配列するという結果になってしまうのだ\*<sup>32</sup>。この意味で、王西彦の小説が女性自体にとっては何ら益するところはないという批判は当然あり得る。実際、王西彦のように女性という問題の前で困惑するだけでは、女性の社会参加への具体的な道は閉ざされたままである。

第二に、王西彦の言説の中で女性がことさらに問題とされ興味の対象とされる点である。『浮出歴史地表』の著者が言うように、四十年代の国民党統治区において個性も女性と共に苦況にあったならば、とりたてて女性のみを問題にしなければならない理由はどこにあるのか。この意味で『浮出歴史地表』や王西彦が「女性」性を所与のものとして考えていることは疑問に付されなければならないだろう。そして実は、一見徹底した男女平等論に見える孔羅荪の主張も、男性の側から女性を特別視していることでは王西彦と相違はないのではないだろうか。孔は、「婦女問題」の論客と足並みを合わせ、抗戦に貢献できない存在として女性を描くことを容認できなかった。が、「華威先生」のような男性に対する諷刺を擁護したのに対し、女性に対するこのような諷刺を容認できないことは、逆説的に彼が女性を男性と異なった存在として見ていることを証明するであろう。つまり、男女平等は女性を男性と異なった存在として庇護しなければ実現できないのである。

これから考えられることは、彼らが「母性」「民族」のいずれに重きを置くかに関わらず、

女性を問題として際立たせるような共通するコンテキストの中に彼らがいたのではないか、そして誤解を恐れずに言えば、このコンテキストこそ「国民意識」、ひいては「近代」ではないだろうか、ということである\*33。思うに、「母性」と「同化」、「差異」と「平等」というジレンマを突破する鍵はここにあるのではないだろうか。近代の国家意識は、女性を「女性」として浮上させ、「参加型」にせよ「分離型」にせよ国民国家にとって異質な存在として成り立たせた。王西彦が立ちすくんだ問題は、この意味で真の問題ではなく、そもそも国民国家を疑わない限り解決不可能な問題だったといえるのではないだろうか\*34。

---

\*1 林林「談「華威先生」到日本」（原載「救亡日報」一九三九年二月二日、蘇光文編選『文学理論史料選』四川教育出版社、一九八八年所収）。林林はここで「華威先生」の日本語訳が掲載された雑誌を『改造』十一月号と記し、その後中国で出版された各種の現代文学史にもそのまま継承されているが、近年の日本側の研究によって「華威先生」が実際に掲載されたのは『文芸』十二月号だったことが明らかにされている。弓削俊洋「「華威先生」の“訪日”——日中戦争下の文学交流と“非交流”」（『愛媛大学法学部論集 文学科編』第二三号、一九九〇年）参照。

\*2 男。雑文作家、文芸評論家。一九一二年濟南生まれ。上海の人。北京での中学時代から文学を愛好。一九二八年、一家でハルビンに移る。郵便局に勤めながら投稿、舊書店を組織、『舊書』週刊を発行。一九二八年上海へ。一九三五年、漢口『大光報・紫線』主編。抗戦勃発後、『戦闘』旬刊を創刊。一九三二年文協の仕事に参加、『抗戦文芸』編集委員に。四〇年、重慶『文学月報』主編。四八（四九？）年、共産党入党。「解放」後、南京市文聯副主席。五四年、作家協会上海分会秘書長。以上馬良春・李福田総主編『中国文学大辞典（1-8巻）』（天津人民出版社、一九九一年）、『中国現代文学辞典』（上海辞書出版社、一九九〇年）、徐瑞岳・徐栄街『中国現代文学辞典』（中国鉱業大学出版社、一九八八年）参照。

\*3 王西彦「再論文芸上の現実——由「華威先生」出国所引起的感想」（邵陽『力報・戦時塘田』第三期、一九三九年三月十五日＝未見）。なお、王西彦はこの時期、「希臘主義者」（『抗戦文芸』第三卷第十一期、一九三九年二月二五日）など、「華威先生」と近い作風の諷刺小説を発表している。

\*4 管見の限り、彼が野黎の筆名で書いた「暴露・諷刺・矯奸」（蔡儀主編『中国抗日战争時期大後方文学書系 第二編 理論・論争第一集』重慶出版社、一九八九年所収、原載は『抗戦文芸』第五卷第一期、一九三九年十一月）がある。蘇光文『大後方文学論稿』（西南師範大学出版社、一九九四年）一〇三頁でも、暴露と諷刺に反対する意見に反論した文学者のリストの中に彼の名が連ねられている。

\*5 羅蓀「「籠」と「鳥」——關於「家鴿」及其他的一段雜感」（艾以等編『王西彦研究資料』北京十月文芸出版社、一九九六年所収、原載は『文芸生活』第二卷第四期、一九四二年六月）。以下「雜感」と表記。

\*6 「關於「家鴿」的辯解」（『文芸生活』第三卷第四期、一九四三年二月）四〇頁。なお、私はかつて拙稿「王西彦民国時期著目録」（『雙聲』第五号、一九九七年）において、同文の執筆時期を誤って「一九四一年作、一九四二年二月改作」と記していたが、これは羅蓀の「雜感」の執筆時期であり、正しい執筆時期は後で触れるように一九四二年九月五日である。お詫びして訂正したい。

\*7 以下の女職員問題の経緯については、主に中華全国婦女聯合会『中国婦女運動史』（春秋出版社、一九八九年）[邦訳『中国女性運動史1919-49』中国女性史研究会編訳（論創社、一九九五年）]、呂芳上「抗戦時期的女権論辯」（『近代中国婦女史研究』第二期、一九九四年）を参照した。また、四十年代の「女性

の位置は家庭」論に関連する論考としては、前山加奈子「母性は劣位か——一九三〇、一九四〇年代における潘光旦の女性論」（中国女性史研究会編『論集中国女性史』吉川弘文館、一九九九年所収）がある。

＊8 『中国婦女運動史』は講演には触れず、一九三九年十月に『改進』半月刊に「我的理想国」を發表したとするのみである。一方、呂芳上前掲論文は、「我的理想国」を民国二八年[一九三九年]十月講、原載『改進』半月刊とするのみで、掲載された号数は記されていない。邱文生主編『永安抗戰進步文化活動』（海峡出版社、一九九四年）に収められた「『改進』目録」を見ると第二卷第五期（三九年十二月一日）に陳儀によるこの文章があり（但し題名は「我們的理想国」となっている）、講演が十月、発表が十二月と考えるのが妥当だと思われる。なお、呂芳上によれば、「我的理想国」は江西省婦女指導處編『婦女職業問題討論集』（江西泰和出版、一九四一年）にも収められているという。

＊9 呂芳上前掲論文、九一頁。ところで、これまで見てきたように、総力戦体制であるはずの戦時下で女性解雇の動きが広まったことは一見奇異に思える。理由の一つとして、中国の国民国家としての抗戦体制の不整備や、あるいは日本の侵略による撤退といった中国の特殊事情が考えられるが、他に理由を求める上でヒントになりそうなのが上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、一九九八年）における次のような指摘である。すなわち、総力戦における国民国家のジェンダー編成の再編には「ジェンダー分離型」と「参加型」があり、枢軸同盟諸国は「分離型」をとったが、一方、連合国側の女子徴兵を伴う「参加型」についても、女性兵士は例外的存在であり後方支援などに任務が限定されたことや出生奨励策などが例として挙げられ、「女子徴用を促進する『参加の思想』も、ジェンダー分離戦略の内に」（七五頁）あるとされる。つまり「分離型」も「参加型」も同じ国民国家のジェンダー編成のもとにある」（七六頁）のだ。

＊10 福建省政府主席時代の陳儀については、鈴木正夫「陳儀についての覚え書——魯迅、許寿裳、郁達夫との関わりにおいて」（鈴木「郁達夫——悲劇の時代作家」研文出版、一九九四年所収）に詳しい。

＊11 王西彦「野火的聯想——關於『現代文芸』的回憶」（『読書』一九八三年第五期）八一頁。

＊12 ただし孔羅荪も、『現代文芸』には「家鴿」が掲載された第三卷第一期の前号である第二卷第六期（四一年三月二五日）に孟絲菴の筆名で「哈爾濱城頭の夢」を寄稿している。

＊13 尹及は未詳。従文は、作家の沈従文の筆名である。

＊14 阪口直樹『十五年戦争期の文学——国民党系文化潮流の視角から』（研文出版、一九九六年）二八三頁。

＊15 前掲『中国婦女運動史』四七八頁。

＊16 また、夫は「談家庭」を弁護する際、これは小説家自身の経験に基づくのかかもしれないとして、沈従文・張兆和夫妻の恋愛の経歴を述べる。ただし、現在、『王西彦選集・第一卷』（四川文芸出版社、一九八五年）に収められた「家鴿」では「大学教授兼小説家」とされていた「談家庭」の著者が「哲学者」に改められ、沈従文が著者であることが読みとれないようになっている。また、邵華強編『沈従文研究資料』（花城出版社、一九九一年）に収められた邵華強「沈従文年譜簡編」（実質的に著目録を兼ねる）でも、彼が『戦国策』に発表した文章のうち、「談家庭」だけが未収録である。もちろん八十年代に花城出版社から刊行された『沈従文文集』のいずれの巻にも同文は収録されていない。沈従文にとって不名誉な過去は隠蔽した方がいいという配慮が働いているのだろうか（ただし日本で出版された研究書、小島久代『沈従文——人と作品』（汲古書院、一九九七年）に付された沈従文の年譜では、「談家庭」とそれが引き起こした論争に触れられている）。

\*17 三十年代、王西彦が沈從文に見せていた原稿は、沈從文の手により、沈自身が主編を務める『大公報・文芸』や『国聞週報』、あるいは凌叔華主編の『武漢日報・現代文芸』に掲載された。一方、同時期王西彦は孔羅荪主編の漢口『大光報・紫線』にも寄稿しているようであり、あるいはこれも沈從文の手を通じて(同じ武漢の『武漢日報・現代文芸』を経由して?)原稿が渡った可能性があり、それによって孔の中で王=沈の弟子というイメージができていたのかもしれない。

\*18 王西彦「寛厚の人、並非孤寂の作家——關於沈從文的為人和作品」(王著『凄愴的鏡子』花城出版社、一九九二年所収)参照。また、この回想の中で王西彦は、一九四四年に桂林『力報・新墾地』の主編を務めていた際、躊躇したあげく沈從文の当時の小説『看虹録』『摘星録』を批判する文章[許傑「現代小説過眼録(下)二・上官碧的『看虹録』」(『力報・新墾地』一九四四年二月九日掲載)を指す]を掲載したことに触れている。この「家鴿」において「談婦女」を否定も肯定もせぬまま引用していることから、かつての師の言論に対する困惑ないし態度の保留が読みとれはしないだろうか。(ところで小島前掲書に「この2つ[沈從文『看虹録』、『摘星録』]の姉妹篇は、王西彦、許傑<sup>マツ</sup>から「エロチックな傾向」とか「エロ文学」と批判された」(左開き十三頁)とある。王の回想によれば彼は直接批判したわけではなく、編集者として許傑の文章を掲載しただけである。何か別の根拠があるのだろうか。)

\*19 ある新聞に発表されたという「霞」(詳細不明)を改作し「曠野」として『創作月刊』第六期(四二年八月)に発表した。『王西彦選集・第一巻』(四川文芸出版社、一九八五年)には「走向曠野」と改題されて収められたが、ここには「一九四〇年六月作於永安」とあり、これが「霞」の執筆時期に当たるのかも知れない。

\*20 注\*6参照。以下「辯解」と略記。

\*21 未詳。今後の調査の課題としたい。

\*22 この王西彦の言葉から想起したいのは、冒頭で触れた「華威先生」をめぐる論争である。孔羅荪はその際には否定的人物を描き暴露することの必要を説いていたのである(「暴露・諷刺・鑄奸」(前掲))が、女性を諷刺した「家鴿」に対しては彼の態度に変化が認められるといえよう。

\*23 おそらく長篇小説「古屋」に登場する独身主義者・洪翰真を指すと思われるが、彼女が初めて登場するこの小説の第二部は、羅荪の「雜感」発表の約二ヶ月後、「辯解」執筆の約三週間前の四二年八月十三日に書かれ、発表は「辯解」発表の一ヶ月後であった。「深淵——古屋再記」(『文芸雜誌』第二卷第三期、一九四三年三月十五日)がそれである。

\*24 「両姉妹」「歌」などがこの系譜に属する小説である。拙稿「国民の誕生と読書——王西彦と近代・序論」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第一号、一九九八年所収)九七〜九八頁参照。

\*25 注\*19に同じ。

\*26 注\*23参照。

\*27 「母性」の初出は未見で、執筆日の記載があったかどうかは不明。「母性」を同日の作とするのは「王西彦選集・第二巻」(四川文芸出版社、一九八五年)だが、「紅花」と混同された可能性もあり、同書ではなぜか「紅花」を改題した「犠牲者」の執筆日が六日前の十月十日とされている。また以上三篇の小説の刊記は以下の通り。

「雨天」『文芸雜誌』創刊号、四三年七月一日=未見

「紅花」『文学創作』第二卷第一期、四三年五月一日

「母性」『新文学』第一卷第一期、四三年七月十五日

すべて王西彦『家鶴』（桂林・文学書社、一九四三年十一月）に収める。

\*28 孟悦・戴錦華『浮出歴史地表』（河南人民出版社、一九八九年）二〇九頁。

また、抗戦下において女性運動が「国家への貢献にのみ向かい、女性の権利を求める方向へと進まなかった」という議論が、以下の論文に見られる。Pan Yihong, "Feminism and Nationalism in China's War against Japan" in *The International History Review* 19.1(1997).

\*29 上野前掲書、四四頁。

\*30 夏曉虹『晚清文人婦女観』（作家出版社、一九九五年）八一頁[邦訳『纏足をほどいた女たち』藤井省三監修、清水賢一郎・星野幸代訳（朝日新聞社、一九九八年）一四四頁に該当]。

\*31 上野千鶴子の言う、「女性の国民化」において見られる参加型と分離型の二つの道に指定することができよう。註\*9参照。

\*32 cf. Rey Chow, *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies* (Bloomington and Indianapolis: Indiana U.P., 1993), chap.2. 私は別の所で王西彦の三十年代の農民小説について同様の視点から論じたことがある。拙稿「民間」の表象——王西彦における「知識人」と「民間」(小谷一郎他編『転形期における中国の知識人』汲古書院、一九九九年所収)参照。

\*33 上野千鶴子は「参加型」にせよ「分離型」にせよ「女性の国民化」のヴァージョンであるという(上野前掲書、九〇頁)。そして「近代」が生んだ「個人」が「男性」を範型に作られているところでは、女性性は「平等か差異か?」のジレンマに立つしかないとして、近代の枠内では女性問題の解決は不可能であると述べる。そして、「女性」こそは近代＝市民社会＝国民国家がつくりだした当の「創作」である」とまで言う(同、九五頁)。

\*34 日本人(の男性)である私が、日本が侵略した中国のナショナリズムを相対化しようとするのは、増田渉の「華威先生」翻訳が「誤解」されたように、日本の加害性を正当化することになるとの批判を招くかも知れない。上野の第二次大戦戦勝国などに対するナショナリズム批判がしばしば招く反発も、この点にある。(上野前掲書、一九四～一九五頁参照。また批判の代表例として日本の戦争責任資料センター編『ナショナリズムと慰安婦問題』(青木書店、一九九八年)に収められた高橋哲哉「「慰安婦」問題とネオナショナリズム」、金富子「朝鮮人「慰安婦」問題への視座——フェミニズムとナショナリズム」、岡真理「私たちはなぜ、自ら名をることができるか——植民地主義的権力関係についての覚え書き」等参照。)しかし中国において国民国家の制度性が問われることは稀であり、女性の問題を考える際にも国民国家の神話への従属をアプリアリに前提していることがほとんどではないだろうか。ナショナリズムを批判的に再考するためにも、ジェンダーという変数を考慮に入れていくことが近現代中国の研究においても必要となるのではなかろうか。